

しのぶ草



平成 26 年 2 月 17 日 発行

発行：宮崎市教育委員会文化財課

宮崎市きよたけ歴史館

所在地：宮崎市清武町加納甲 3378-1

TEL 0985-84-0234 FAX 0985-84-2634

〈韓国嶺南大学校学生来館〉

1月17日(金)に、韓国嶺南(ヨンナム)大学校の学生と先生たち14名が来館されました。宮崎大学研究国際部の招きで、異文化体験



をするとともに交流を深めるために、1週間ほど宮崎に滞在されました。当館では茶道と華道の体験をされましたが、大変真剣な眼差しで、楽しそうに取り組んでおられました。当館を国際交流、国際理解の場としても活用していただけることは、本当にありがたいことです。

〈第5回「歩こや清武」〉



1月15日(水)に、第5回「歩こや清武」を実施しました。大変穏やかでよい天候に恵ま

れ、参加者も心地よさそうに歩いておられました。

今回は、「南光院」「稲津掃部助墓かみんのすけ」「清武城本丸跡」「伊東祐堯公墓すけたか」を歩いて回りました。それぞれの場所で、身近な歴史の一端を感じ取っていただけたのではないかと思います。この機会が、今まで以上に郷土の歴史に興味、関心をもっていただくきっかけになればとも思います。ご参加ありがとうございました。

★講座のご案内★

◇ 宮崎三計塾◎ 最終回

日時：平成26年3月16日(日)午前10時～正午

場所：きよたけ歴史館 (研修室)

講師：宮崎市教育委員会 文化財課 主査 井田 篤

内容：「息軒の眼に映った江戸から明治に変わるトキ」

※ 当日も受け付けています。お気軽にご参加ください。



〈日向路「介さん」道中記⑩〉最終回

高千穂往還を西へと向かう介さん一行は、日之影の難所へとさしかかった。日向灘沿いの平らな道とは比べようもない峻険な山道が続くこのあたりは、まさに上ったり下ったり、ただでさえつらい夏場の旅が彼らにはよりつらく感じ、かく汗は多く吐く息は激しかったと思われる。

「舟の尾より、一ノ水まで三里、右、一里半に日影川と言う、舟渡しあり、其の源、豊前(後か)より出んと言う、日影山有り、難所、人足僅かに通り、馬路煮し、役夫荷物を負い、輿、強いて通す。」

舟の尾には、寛永三年(1626)に延岡藩主有馬直純によって設置された代官所があった。代官所とは現在の支所のような役割を果たすもので、治めていた範囲は西臼杵郡に諸塚村を加えたいわゆる高千穂郷である。この代官所については、介さん一行が通った約百年後の寛政九年(1797)に火災によって消失し宮水に移動している。現在、その跡地は竹やぶにおおわれており、残念ながら介さん一行ゆかりの痕跡を見ることは出来ない。続く一ノ水(日之影七折)は、彼らにとって日向路最後の宿である。この「一ノ水」という地名については、神話の時代に高千穂神社の三毛入野命(ミトリノミコ)が賊を平定して戻る途中、湧き出る水を飲んでその旨さに「一ノ水」と名付けたという言い伝えが残っており、介さん一行も、過酷な高千穂往還の道中の疲れを癒すために、この地の旨い水をたっぷりと飲んだことだろう。

日向路最後の一日、彼らは一ノ水から七折坂を越え高千穂岩戸を経てついに日向と肥後の国境へとたどり着いた。

「肥後、岩上より細川越中守殿関所有り、柳まで武里半、柳より高森まで壱里半、右、左衛門佐殿案内、此の一宿まで来らん 此こまで、越中守殿衆出迎えられる」

関所には肥後細川家の家臣が一行を出迎えており、その後、彼らは草原広がる南阿蘇へと歩を進めていった。

『大日本史』編纂のための史料収集が藩命であったため、この日向路の旅で介三郎は鶴戸神社(日南市)や黒貫寺(西都市都於郡)などで史料調査を行った。しかし、彼の望むような史料はほとんど手にすることが出来ず、一行にとっては物足りない結果であったであろう。介さん一行の日向路、やや消化不良の感が残るがこの話しには実は続きがある。介さんの旅の百七十七年後、介三郎の子孫である佐々俊介という人物が日向国を訪れ、先祖の旅を補うように詳細な調査を行っていたのである。すなわち介三郎が達成できなかった旅の目的は、その子孫によって達成され、『大日本史』完成へと繋がっていったことになる。

介さん一行の日向路、俊介の日向路まで書き添えたところで、残念ながら終わりにしたいと思う。(おわり)

<()>ご愛読誠にありがとうございました。(文責 井田)